

「ボードレール・コンサート」参考資料

2022年6月2日(木) 19時 日仏会館ホール

I. ボードレールが源泉とした音楽

「音楽」

音楽はしばしば、海のように私を捉える！

色淡い私の星の方へと、

空をおおう濃い霧の下、あるいは広漠たる^{エーテル}瀨気の中に、

帆を掲げ船出する私。

胸を張り出し、帆布さながら

肺臓はふくらんで、

夜の闇が私の目にかくす十重二十重の大波の

背を、よじのぼる私。

私は感ずる、行き悩む船のありとあらゆる情念が、

この身のうちに顫えるのを。

順風が、身をひきつらせ荒れ狂う^{あらし}暴風雨が、

測り知れぬ深淵の上に

私を揺する。またある時は、平らかな風、わが絶望の

大いなる鏡！

(ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫)

「われわれのうちのいったい誰が、野心をいだいた日々には、律動も脚韻も欠きながら音楽的で、魂の叙情的な動きや夢想の波のようなうねりや意識の突如たる身ぶるいにぴったり合うほど、十分なやかでかつ十分にぎくしゃくとした、詩的散文の奇蹟というものを、夢みなかったでありましょうか？」

(ボードレール『パリの憂鬱』「アルセーヌ・ウーセへ」、
『ボードレール全集 IV』阿部良雄訳、筑摩書房)

「私のように、音楽を知らず、その素養としては（なるほど大きな快樂をもってではあります
が）ヴェーバーとベートーヴェンの美しい曲をいくつか聴いただけに限られる人間が[...]」

(ボードレール、リヒアルト・ヴァーグナー宛書簡、1860年2月17日、
『ボードレール全集 VI』阿部良雄訳、筑摩書房)

カール・マリア・フォン・ウェーバー Carl Maria von Weber (1786-1826)

『舞踏への招待』 作品 65 : *Invitation à la danse* Op.65

「灯台」

[...]

ドラクロワ、悪しき天使らの出沒する血の湖、

常緑の樅の林はその上に影を落し、
陰鬱な空の下、異様な吹奏楽隊は、
ヴェーバーのおし殺された溜息のように、過ぎてゆく。
[...]

(ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫)

「旅への誘い」

[...] そうとも、まさにそこへこそ出かけて行って、呼吸し、夢み、もろもろの感覚の無限によって時間を長からしめるべきなのだ。「ワルツへの誘い」を書いた音楽家がいる。愛する女、選ばれてた妹に捧げられるような「旅への誘い」を作曲するのは、誰だろうか？

(ボードレール『パリの憂鬱』、『ボードレール全集 IV』
阿部良雄訳、筑摩書房)

リヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner (1813-1883)

フランツ・リスト編曲：歌劇『タンホイザー』より「巡礼の合唱」 S.443

歌劇『ローエングリン』より第一幕への「前奏曲」

フランツ・リスト編曲：歌劇『ローエングリン』より第三幕への「前奏曲」

「祝典と結婚式の歌」 S.446/1

Richard Wagner / Franz Liszt : « Choeur des pèlerins », extrait de Tannhäuser S.443

Richard Wagner : « Prélude » du premier acte de Lohengrin

Richard Wagner / Franz Liszt : « Prélude » du troisième acte et choeur nuptial de Lohengrin S.446/1

ボードレールは1849年7月13日付の手紙（受取人未詳）で既に、自分と相手（手紙の受取人）は、ヴァーグナーに対する共通の讃嘆の念を抱いていると書く。しかし、ボードレールが本格的にヴァーグナーの音楽に触れ、ヴァーグナーの中に、自分を「偉大なものへと呼び戻」してくれる音楽家を見出す機会となったのは、1860年はじめにイタリア座で催された、器楽と合唱のコンサート（『さまよえるオランダ人』、『タンホイザー』、『ローエングリン』、『トリスタンとイゾルデ』の抜粋）であった。直後の1860年2月17日に、ボードレールはヴァーグナーに宛てて、熱狂的な手紙を書く。そして、翌1861年3月のオペラ座での『タンホイザー』公演のあと、ボードレールは、小冊子『リヒャルト・ヴァーグナーと『タンホイザー』のパリ公演』を刊行する。この冊子の中で、ボードレールは、『ローエングリン』の序曲を聞いて「地上からさらわれるような思いがした」と書いている。一方、『タンホイザー』の「巡礼の歌」については、彼はこう記す。「「巡礼の歌」がまず最初に、至高の掟の権威をもって、あたたかもただちに人生の真の意味、普遍的な巡礼の目標、すなわち神を指し示すもののように、出現する。」

フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886)

「ハンガリー狂詩曲第2番」 S.244/2 « Rapsodie hongroise n° 2 » S.244/2

小冊子『リヒャルト・ヴァーグナーと『タンホイザー』のパリ公演』の中でボードレーは、リストが1851年にフランス語で刊行した、『リヒャルト・ヴァーグナーの『ローエングリン』と『タンホイザー』』からの長い引用を行っている。

しかし、ボードレーのリストに関する関心は、むしろ、『ハンガリーにおける、ジブシーとその音楽について』（1859）の著者としてのリストであったようである。『赤裸の心』の中には、リストの名を、放浪的・ボヘミア人的性格と結びつけ、それを「音楽によって実現される増殖の感覚」の崇拜として同一視している。この放浪的性格は、「吟遊」「寄せ集め」という意味を含むギリシャ語を起源とする、「ラプソディー」という語とも結びつく。詩人の晩年、画家のマネは、ブリュッセルにいるボードレーの依頼を受けて、「リストのラプソディー」を送っている。

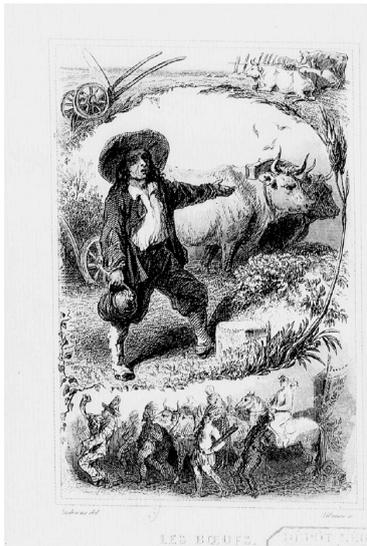
1860年2月、ボードレーがヴァーグナーを題材とする詩を発表するという噂があった。しかしこの詩は書かれずに終わり、その数年後、彼は、リストへの献辞のついた散文詩「バックスの杖」を雑誌に発表することになる。

ピエール・デュボン Pierre Dupont (1821-1870)

『歌と歌謡』より「牛たち」「労働者の歌」「諸国民の歌」

« Les boeufs », « Le chant des ouvriers », « Le chant des nations » extraits de
Chants et chansons

デュボンはリヨン出身の民衆詩人、歌謡作者で、田園詩や政治詩、愛、自然、人間の善良さなどをテーマとした歌を得意とする。中でも「牛たち」は大成功を博し、「労働者の歌」は、ボードレーによって、「労働のマルセイエーズ」と形容された。1848年2月革命に際し、デュボンとボードレーは同様の強い政治的関心を示す。1851年にデュボンの4巻本の楽譜付き歌集『歌と歌謡』が出版された時、ボードレーはその第一巻の序文を書いた。ボードレーは、デュボンが自らの歌を見事に歌うのをしばしば耳にしたと書いている。歌集第二巻の序文は、作曲家のエルネスト・レイエールが執筆し、その中には、彼自身も採譜に協力したことが記されている。



Les bœufs (1845)

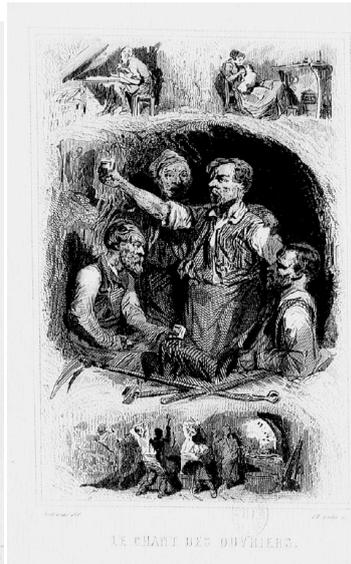
J'ai deux grands bœufs dans mon étable
 Deux grands bœufs blancs, marqués de
 roux;
 La charrue est en bois d'érable,
 L'aiguillon en branche de houx ;
 C'est par leurs soins qu'on voit la plaine
 Verte l'hiver jaune l'été;
 Ils gagnent dans une semaine
 Plus d'argent qu'ils n'en coûté,

S'il me fallait les vendre,
 J'aimerais mieux me pendre ;
 J'aime Jeanne ma femme, eh bien, j'aimerais
 mieux
 La voir mourir, que voir mourir mes bœufs.

[...]

Le chant des ouvriers (1846)

Nous dont la lampe, le matin,
 Au clairon du coq se rallume,
 Nous tous qu'un salaire incertain
 Ramène avant l'aube à l'enclume,
 Nous qui des bras, des pieds, des mains,
 De tout le corps luttons sans cesse,
 Sans abriter nos lendements
 Contre le froid de la vieillesse,



「牛たち」

俺の牛小屋には二頭の大きな牛がいる
 赤茶の斑点のついた二頭の白い大きな牛が
 犁（すき）はカエデの木で作ったもの、
 刺し棒はヒイラギの枝でできたものを使う
 牛たちの世話をしながら
 冬には緑の、夏には黄色の平原が目に入る
 牛たちは一週間でこれまで彼らにかけてき
 た以上の金を稼いでくれる。

もしもあの牛たちを売らねばならぬなら、
 俺は首を吊ったほうがました。
 俺には愛する妻のジャンヌがいるが、牛た
 ちの死ぬのを見るくらいなら、妻の死ぬの
 を見る方がました。
 (以下省略)

「労働者の歌」

Aimons-nous, et quand nous pouvons
 Nous unir pour boire à la ronde,
 Que le canon se taise ou gronde,
 Buvons,
 A l'indépendance du monde!
 [...]

朝、俺たちのランプは、にわたりのラッパ
を合図に灯る。
俺たちは皆、夜明け前から、なけなしの給
料を得るために、^{かなとこ}鉄床へと向かう
俺たちは、腕、足、手と
体全体を使って、休むことなく闘い続け
る、

Le chant des nations (1847)

Tous les captifs qui sur la terre
Courbaient leur front, l'ont relevé
Pour commencer la grande guerre,
Par qui leur droit sera sauvé.
Ils ont fait ranger à leur tête
Les hommes libres, leurs aînés,
Qui s'en vont calmes à la fête
Devant ces lions déchaînés.

Le jour des grands destins se lève
Au son du cuivre et du tambour.
O guerre ! c'est ton dernier jour !
Le glaive brisera le glaive,
Et du combat naîtra l'amour.
[...]

明日の保証も得られぬまま、
老いのもたらず寒さに抗いながら。

俺たち、互いに愛し合おう、そして、俺た
ちの心が一つになって
びんを回して酒を飲むことができるなら
大砲が黙ろうが吠えようが構うものか
乾杯しよう
世界の独立のために
(以下省略)
「諸国民の歌」

屈服の頭を下げてきた、地上の囚われ人た
ちは皆、その頭を再びあげた。
彼らの権利が救済される、偉大なる戦争を
開始するために。
隊列の先頭には、自由である者たち、つま
り彼らの先達が配された。この自由な者た
ちは、穏やかに、祭りへと向かう。これ
ら、鎖をとかれた獅子たちの前を。

大いなる運命の日が昇る。
金管楽器と太鼓の音とともに。
おお戦争よ。今日はお前の最後の一日なの
だ。
剣は剣を砕くだろう。
そして、闘いからは、愛が生れるだろう。
(以下省略)

II. ボードレールを源泉とした音楽

後半のプログラムは、ボードレールに対する4者4様のアプローチである。1861年のパリ・オペラ座での「タンホイザー」上演以前からボードレールは既に、ヴァーグナーの音楽を擁護していた。従ってここにはボードレールの詩作を通じた、ヴァーグナーの音楽に対する4人の作曲家の異なった反応があるとも言える。デュパルクは、ヴァーグナーに大変傾倒し直接の影響を受けていた。フォーレのヴァーグナーに対する位置は微妙だが、バイロイト音楽祭にも出かけ、またメサジェと共作でピアノ連弾曲「バイロイトの思い出」を作曲している。ヴァーグナーを否定も肯定もせず、少々の影響を受けているというべきだろうか。ドビュッシーは一時、十分にヴァーグナーに魅了され「ボードレールの5つの詩」を作曲するが、その後ヴァーグナーを否定することで新しい時代を開いていく。そのドビュッシーから「土の薫る音楽」と好意的に評されたのがセヴラックの地方色豊かな音楽であり、本日のプログラムの中では最もヴァーグナーの直接の影響から逃れている。

アンリ・デュパルク **Henri Duparc (1848-1933)**

「旅への誘い」 « *L'Invitation au voyage* »

(楽曲解説)

アンリ・デュパルクは、フランスロマン派の作曲家で、セザール・フランクに師事した。1885年、37歳の時に神経衰弱と診断され創作活動を続けることが困難となり、結局作曲の筆を折る。多くの作品が自身の手によって破棄され、最終的にいくつかの歌曲しか残さなかったが、そのどれもがドイツ・リートとは異なるフランス歌曲の新しい世界を開いた素晴らしい作品である。ルコント・ド・リール、テオフィル・ゴーチエ、ジャン・ラオールといった詩人による歌曲が知られ、ボードレールの詩では、「旅への誘い」、「前世」の2曲を作曲している。歌曲の形式には、有節形式と通作形式の2つがあり、前者は詩節ごとにほぼ同じ音楽的展開が用意され、後者は詩節に関わりなく最初から最後まで1つの音楽的な流れが続いていく。「旅への誘い」は、基本的に有節歌曲、すなわち2つの詩節にほぼ同じ音楽的展開が用意されているが、2番（詩の第3節）に通作形式の影響による変形が加わり大きなクライマックスを迎える。

(詩篇解説)

やさしい情愛をこめて、「わが子、わが妹」にかの地に行こうと呼びかける。やわらかな夕日の光の中で、全てが動きを停止して眠りの中に入っていきような、「秩序」と「美しさ」と「奢侈」と「静けさ」と「逸楽」の国への、旅の誘いを描いた美しい作品。

L'Invitation au voyage

Mon enfant, ma sœur,
Songe à la douceur
D'aller là-bas vivre ensemble !
Aimer à loisir,
Aimer et mourir
Au pays qui te ressemble !
Les soleils mouillés
De ces ciels brouillés
Pour mon esprit ont les charmes
Si mystérieux
De tes traîtes yeux,
Brillant à travers leurs larmes.

Là, tout n'est qu'ordre et beauté,
Luxe, calme et volupté.

Des meubles luisants,
Polis par les ans,
Décoreraient notre chambre ;
Les plus rares fleurs
Mêlant leurs odeurs
Aux vagues senteurs de l'ambre,
Les riches plafonds,
Les miroirs profonds,
La splendeur orientale,
Tout y parlerait
A l'âme en secret
Sa douce langue natale.

Là, tout n'est qu'ordre et beauté,
Luxe, calme et volupté.

Vois sur ces canaux
Dormir ces vaisseaux
Dont l'humeur est vagabonde ;
C'est pour assouvir
Ton moindre désir
Qu'ils viennent du bout du monde.
- Les soleils couchants
Revêtent les champs,
Les canaux, la ville entière,

「旅への誘い」

我が子よ、わが妹よ、
思っても見よ、その快さ、
彼処に往き、二人して暮らす日の！
心まかせに愛し合い、
愛し合って、死のうもの、
きみにさも似た、かの国に往き！
この曇った空に照る、
うるんだ太陽が、
私の精神にはたらきかけるその魅力、
それはいとも不可思議に、
裏切りもののきみの眼の、
涙にぬれつつ、輝くさながら。

彼処では、すべてがただ秩序と美しさ、
奢侈、静けさ、そして逸楽。

光沢のよい家具が、
歳月に磨かれて光り、
私たちの寝室を飾るだろう。
世にも珍しい花々の
匂にまじり漂うのは、
微かに、あるかなきかの、竜涎の香、
贅を凝らした天井も、
奥行き深い鏡も、
東方の国をさながらの輝かしさも、
すべては語り掛けるだろう、
魂に向い、ひそやかに、
生れの国の、なごやかな言葉を。

彼処では、すべてがただ秩序と美しさ、
奢侈、静けさ、そして逸楽。

見たまえ、あの運河の上に、
眠る船。
きみの望みは、ささやかなりと
見逃さず、充たすため、
船たちは、世界の涯からやって来る。

— 入り陽の光は、
野や畑を、運河を、

D'hyacinthe et d'or ;
Le monde s'endort
Dans une chaude lumière.

Là, tout n'est qu'ordre et beauté,
Luxe, calme et volupté.

そして都会の隅々を、金色と、
赤紫に、染めなす。
世界は眠りこむ、
あたたかい光につつまれて。

彼処では、すべてがただ秩序と美しさ、
奢侈、静けさ、そして逸楽。

(ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫)

ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré (1845-1924)

「秋の歌」« Chant d'automne »

(楽曲解説)

ガブリエル・フォーレは、生涯歌曲を書き続け、作品1から最晩年の歌曲集まで、実に90曲以上を残している。その意味でフォーレ個人の創作史としてはもちろんのこと、フランス歌曲というジャンルの発展にとっても、フォーレの歌曲は大変重要な時代の証言となった。初期のヴィクトル・ユゴーなどのロマン派の詩人への附曲に始まり、次第に高踏派の詩人やポール・ヴェルレーヌに興味を持つようになる。ボードレールには1871-77年、作曲者20歳代後半から30歳前後にかけてのまだ若き日に3曲を残している。

「秋の歌」では、先ほどの「旅への誘い」よりも、さらに有節形式と通作形式の融合が進み、通作の要素がより強く現れている。旋律線も背景の和声も、この頃のフォーレの創作としては幾分重苦しく劇的に聴こえる。詩人の違いにより、こうして響きや表現が異なってくることは大変興味深い。4番（詩の第5節）に至ってテンポや調性が変化、曲想が一変し3つの下降する音が優しいアルペジオに乗って歌われる。

(詩篇解説)

灼熱の夏（「灼熱の真白な夏」）と、凍り付く冬（「赤く凍った塊り」と化す詩人の心）という、二つの極限の激しさの間で辛うじて成り立つ、束の間の秋の柔らかさ、甘美さ（「暮れゆく季節の/黄いろくやわらかな日射し」を主題とした作品。詩の前半を通して鳴り響く、冬や死を予告する、陰鬱な薪の音が印象的である。

Chant d'automne

I

Bientôt nous plongerons dans les froides ténèbres ;
Adieu, vive clarté de nos étés trop courts !
J'entends déjà tomber avec des chocs funèbres
Le bois retentissant sur le pavé des cours.

Tout l'hiver va rentrer dans mon être : colère,
Haine, frissons, horreur, labeur dur et forcé,
Et, comme le soleil dans son enfer polaire,
Mon cœur ne sera plus qu'un bloc rouge et glacé.

J'écoute en frémissant chaque bûche qui tombe ;
L'échafaud qu'on bâtit n'a pas d'écho plus sourd.
Mon esprit est pareil à la tour qui succombe
Sous les coups du bélier infatigable et lourd.

Il me semble, bercé par ce choc monotone,
Qu'on cloue en grande hâte un cercueil quelque part.

Pour qui ? – C'était hier l'été ; voici l'automne !
Ce bruit mystérieux sonne comme un départ.

II

J'aime de vos longs yeux la lumière verdâtre,
Douce beauté, mais tout aujourd'hui m'est amer,
Et rien, ni votre amour, ni le boudoir, ni l'âtre,
Ne me vaut le soleil rayonnant sur la mer.

Et pourtant aimez-moi, tendre cœur ! soyez mère,
Même pour un ingrat, même pour un méchant ;
Amante ou sœur, soyez la douceur éphémère
D'un glorieux automne ou d'un soleil couchant.

Courte tâche ! La tombe attend ; elle est avide !
Ah ! laissez-moi, mon front posé sur vos genoux,
Goûter, en regrettant l'été blanc et torride,
De l'arrière-saison le rayon jaune et doux !

「身代金」 « La Rançon »

(楽曲解説)

「身代金」は、4行詩4節をフォーレは音楽的に通作している。情景によって響きが次第に変化し、幾分厳しい調子で始まる音楽が次第に緩

「秋の歌」

I

やがて私たちは沈むだろう、冷やかな暗闇のなかへ。
さらば、あまりにも短かったわれらの夏の、烈しい日射しよ！
私の耳に、はや聞えてくるものは、裏庭の敷石の上、
不吉な響きを立てて落ち、こだまする、薪束の音。

私の身のうちに還って来ようとする、冬のすべて一怒り、
憎しみ、戦き、恐怖、無理強いされるつらい仕事、
そして、地獄とばかり北極に閉じこめられた太陽さながら、
私の心はもはや、赤く凍った塊りでしかないだろう。

身ぶるいしながら私は聴く、一つ、また一つ落ちる薪の音を。
断頭台を築く響きも、かほど陰に籠りはすまい。
私の心をたとえるならば、疲れを知らぬ重い槌に、
攻め立てられて、あえなく崩れ落ちる塔。
この単調な響きに身をまかせれば、思い做しか、

あわただしく、柩を閉じる釘の音の、どこからともなく聞えてくる。

誰を葬ろうとてか？— 昨日は夏を、そして今日は秋を！
この不可思議な物音は、出発のように鳴り響く。

II

切れ長のあなたの眼の緑がかつた光を、私は愛する、
優しく美しい女よ、だが今日は、何もかも私には苦く、
何物も、あなたの愛も、瀟洒な居間も、暖炉も、
私にとっては、海の上に照る太陽には如かぬ。

それでもなお私を愛したまえ、心優しい女よ！母となりたまえ、
恩知らずの者のためにさえ、邪まな者のためにさえ。
恋人にまれ、妹にまれ、輝かしい秋の、または、
沈む太陽の、束の間の和やかさとなりたまえ。

なんと短い務め！墓は待ちうける。貪欲な墓！
ああ！許したまえ、きみの膝の上にこの額をおき、
灼熱の真白な夏を惜しみつつ、暮ゆく季節の
黄いろくやわらかな日射しを味わうことを！

(ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫)

み、後半の2詩節では響きが明るくなりテンポも少し早めとなる。この作品も同じ歌曲集に含まれる他の作品（例えば「水のほとり」）よりも、ドイツ的な和声の響きが聴かれるのが特徴的である。

（詩篇解説）

人間は、最後の審判に際して、地獄堕ちを免れるため、「芸術」と「愛」の成果（＝支払うべき身代金）を、神（「裁く方」）あるいは天使に対して示す必要があるというのがこの詩の内容である。当初この詩は、政治的意味を含む、第5詩節が置かれていたが、発表時には4詩節のみの形となった。

La Rançon

L'homme a, pour payer sa rançon,
Deux champs au tuf profond et riche,
Qu'il faut qu'il remue et défriche
Avec le fer de la raison ;

Pour obtenir la moindre rose,
Pour extorquer quelques épis,
Des pleurs salés de son front gris
Sans cesse il faut qu'il les arrose.

L'un est l'Art, et l'autre l'Amour.
- Pour rendre le juge propice,
Lorsque de la stricte justice
Paraîtra le terrible jour,

Il faudra lui montrer des granges
Pleines de moissons, et des fleurs
Dont les formes et les couleurs
Gagnent le suffrage des Anges.

「身代金」

人間は、自分の身代金を払うために、
深く豊かな土壌の、二つの畑をもち、
それを、理性の鋤を用いて、
掘り返し開墾しなくてはならぬ。

ほんの小さな薔薇一本得るためにも、
数本の麦の穂をひねり出すためにも、
己が灰色の額の塩辛い涙で、
絶えずこれらの畑を潤さねばならぬ。

一つの畑は<芸術>、もう一つは<愛>。
一厳正な裁きの下される
恐ろしい日の到来する時、
裁く方を好意的ならしめんには、

お見せしなくてはなるまい、収穫に
満ちた穀倉を、またその形も
その色も、<天使>たちの
賛同を勝ち得るような花々を。

（ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫）

クロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918)

『ボードレールの5つの詩』より「噴水」

« Le Jet d'eau », extrait de Cinq poèmes de Charles Baudelaire

（楽曲解説）

クロード＝アシル・ドビュッシーもまたフォーレと同じく、生涯にわたって歌曲を作曲し、約90曲あまりを残した。その詩人はテオドール・バンヴィルやポール・ブルジェに始まり、シャルル・ド・オルレアン、フランソワ・ヴィヨンといった中世の詩人、そしてヴェルレーヌを

経てステファヌ・マラルメへと至る。ドビュッシーの創作中、響きの上で最もヴァーグナーの影響を色濃く残しているのが、この「ボードレールの5つの詩」(1887-89)である。作曲者唯一のボードレールへの附曲であり、フォーレと同じ20歳代後半の創作である。ドビュッシーの作り出す精妙な響きは、モデルとなったヴァーグナーより洗練されたもので、むしろ遠く20世紀の創作を予言するところがある。詩の構造に忠実に従った大きな3部分形式で、有節形式の高度な変形と言えるだろう。La gerbe d'eau以下の反復される3行詩のルフランとしてのフレーズは、基本的に同じ旋律線と和声構造を持っているが、3度目の最後の反復のみ異なった伴奏形と和声によって歌われ、作品全体の一種の解決となっている。

(詩篇解説)

官能の高まりと鎮静を、間断なく水を噴き上げる噴水の動きに譬えた一篇。ピエール・デュボン(「I.ボードレールが源泉とした音楽」解説を参照)の歌謡、「水上の散歩」との類似が指摘されている。三度のルフラン部分の詩句は、ドビュッシーの歌曲では大幅に改変が加えられている。

Le Jet d'eau

Tes beaux yeux sont las, pauvre amante !
Reste longtemps, sans les rouvrir,
Dans cette pose nonchalante
Où t'a surprise le plaisir.
Dans la cour le jet d'eau qui jase
Et ne se tait ni nuit ni jour,
Entretient doucement l'extase
Où ce soir m'a plongé l'amour.

「噴水」

きみの美しい眼は疲れている、哀れな恋人よ！
長くそのままにいたまえ、眼をもう開けずに、
快樂がきみを不意にとらえた時の
物憂げなその姿態のままに。
中庭では噴水のおしゃべり、
それは夜も昼も黙ることなく、
今宵、愛が私を突き沈めてくれた
恍惚を、やわらかにはぐくむ。

La gerbe épanouie
En mille fleurs,
Où Phœbé réjouie
Met ses couleurs,
Tombe comme une pluie
De larges pleurs.

Ainsi ton âme qu'incendie
L'éclair brûlant des voluptés
S'élançe, rapide et hardie,
Vers les vastes cieux enchantés.
Puis, elle s'épanche, mourante,
En un flot de triste langueur,
Qui par une invisible pente
Descend jusqu'au fond de mon cœur.

La gerbe épanouie
En mille fleurs,
Où Phœbé réjouie
Met ses couleurs,
Tombe comme une pluie
De larges pleurs.

Ô toi, que la nuit rend si belle,
Qu'il m'est doux, penché vers tes seins,
D'écouter la plainte éternelle
Qui sanglote dans les bassins !
Lune, eau sonore, nuit bénie,
Arbres qui frissonnez autour,
Votre pure mélancolie
Est le miroir de mon amour.

La gerbe épanouie
En mille fleurs,
Où Phœbé réjouie
Met ses couleurs,
Tombe comme une pluie
De larges pleurs.

(ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫)

デオダ・ド・セヴラック Déodat de Séverac (1872-1921)
「梟」 « Les Hiboux »

(楽曲解説)

千々の花なして
開く水束、
喜ぶ月の女神は
その色彩を添え
大粒の涙の雨さながら
落ちてゆく水束。

そのように、逸楽の燃える稲妻に
赤々と染められるきみの魂も、
飛び立ってゆく、速やかに、大胆に、
魔法にかけられた広大な空へと。
それから、息も絶え絶えに、
悲しいけだるさの波となって溢れ出し、
目に見えぬ斜面づたいに
私の心情の底まで降りてくる。

千々の花なして
開く水束、
喜ぶ月の女神は
その色彩を添え
大粒の涙の雨さながら
落ちてゆく水束。

おお、夜がこんなにも美しくするきみよ、
何という快さ、きみの乳房の方に身を傾けて、
水盤の中にすすり泣く
永遠の嘆きに聴き入ることの。
月よ、朗々たる水よ、祝福された夜よ、
まわりに戦く樹木たちよ、
御身らの清らかな憂愁は
私の愛を映す鏡だ。

千々の花なして
開く水束、
喜ぶ月の女神は
その色彩を添え
大粒の涙の雨さながら
落ちてゆく水束。

パリ楽壇の音とは異なるラングドックの郷愁の響きがすること、またパリ音楽院ではなく、作曲をスコラ・カントルムで学習したことが、デオダ・ド・セヴラックの音楽にとって決定的な特徴となった。フランス語の歌曲として、ボードレールやヴェルレーヌ、モーリス・メーテルランクの詩に作曲しているだけでなく、カタルーニャ語にも附曲、『18世紀のシャンソン集』も数多い。「梟」はソネを、有節形式の変形としての3部形式にまとめ、同じ旋律主題が第2部で別の和声付けで現れたり、第3部では歌とピアノがカノンを形成したりする。セヴラックの旋法と調性が入り混じった独特の色合いが聴かれる。ピアノ前奏の冒頭にある音による幻想的な舞台設定が魅力的で、まるで梟の鳴き声や森の響きが聴こえるようだ。

(詩篇解説)

イチイの木の陰で一列に並んで赤い眼差しをじっと放っている梟たち。

彼らの不動の姿勢は、過ぎ去る物影に反応して報いを受ける者たちに、「この世においては、喧騒と動きを恐れるべし」という教訓を与える。しかしこの梟の不動性は、やがて、斜めにさしこむ太陽を斥けて夜の闇が訪れる刻に、彼らが一斉に開始するであろう飛翔の、不気味な緊張も同時に含んでいる。

Les Hiboux

「木菟たち」

Sous les ifs noirs qui les abritent,
Les hiboux se tiennent rangés,
Ainsi que des dieux étrangers,
Dardant leur œil rouge. Ils méditent.

彼らを宿す黒い水松の木の上に、
木菟たちは、赤い眼を投げかけつつ、
まるで異国の神々のように、
並んで坐っている。瞑想中なのだ。

Sans remuer ils se tiendront
Jusqu'à l'heure mélancolique
Où, poussant le soleil oblique,
Les ténèbres s'établiront.

身動きもせずじっとしているだろう
憂愁の刻がくるまで、
斜めになった陽の光を押しつけて
暗闇が立ちこめるであろう刻まで。

Leur attitude au sage enseigne
Qu'il faut en ce monde qu'il craigne
Le tumulte et le mouvement ;

彼らの態度は賢者に教える、
この世で恐れねばならぬものは
喧騒であり、動きであると。

L'homme ivre d'une ombre qui passe
Porte toujours le châtement
D'avoir voulu changer de place.

通りすぎる一つの影に酔う男は
場所を変えようと欲したこと
懲罰をいつも荷っている。

(ボードレール『悪の華』阿部良雄訳、ちくま文庫)

資料作成：鈴木啓二、野平一郎